

いばら姫

KHM50 Dornröschen

お姫さまの誕生祝いに、ひとりだけ招かれなかった十三番目のうらない女の贈った言葉は、お姫さまが十五歳になった時つむ（紡錘）に刺されて死ぬ、というものでした。この死の呪いを、十二番目のうらない女は、百年の眠りにかえます。うらないのとおり、お城のものすべてが百年の眠りについて、すっかりいばらに覆われてしまいます。そして、ちょうど百年がたったある日、ひとりの王子がいばらを通り抜けて、お城へ入ります。百年の眠りから覚めたお姫さまは、王子と幸せに暮らしました。

